

「利根川水系霞ヶ浦河川整備計画（原案）」に対する公聴会

日 時：平成 27 年 11 月 4 日（水）11:00～11:20

会 場：茨城県霞ヶ浦環境科学センター

発言者：公述人 1

この機会をいただきましてありがとうございます。わたくしは、取手市から参りました■と申します。今回の計画について公述させていただきます。わたくしは、まずこの利根川水系霞ヶ浦河川整備計画、この計画そのものをこう思います。そもそも、この河川整備計画の始まる前には、河川整備基本方針が決められています。そして、その上で利根川水系全体で、つまり、利根川本線、江戸川、それから渡良瀬川、鬼怒川・小貝川、そして霞ヶ浦、この5つのブロックで並行して河川整備計画が考えられていました。それが2005年で止まります。そして2012年か、13年に再開します。再開と言いますと、5つのブロックが並行してやっているものを再開するはずなんです。しかしながら、やったことは何かと言えば、ハツ場ダムと江戸川のスーパー堤防を施行するために、利根川、江戸川河川整備計画に絞ってやってしまったじゃないですか。その時に、この霞ヶ浦も、鬼怒川も、渡良瀬川も、小貝川も、置き去りにされて、今日まで河川整備計画に手を付けていなかった。あの鬼怒川水害はその結果ではないですか。ハツ場ダムを作るために、あるいは江戸川スーパー堤防を作るために、これまで並行してやっていたものを切り離して、それだけやってしまった。そういうご都合主義は断じて許されないでしょう。

国民はね、そういうことは分からないんですよ。あなたがたが、勝手にご都合主義でやっているということは。いま、ああいった鬼怒川の被害が出て、それでもまだ、こういうような河川整備計画を全く手をつけていなかった、そういうことが分からないです。そういうなかで、この霞ヶ浦の河川整備計画を検討するということは、本来、白紙に戻し、5つブロック、もう一度、利根川、江戸川と渡良瀬川と鬼怒川と小貝川と、そして霞ヶ浦と、これを並行してやるのが筋だと思います。そこから始め直すのが、当たり前所作じゃないですか。よろしいですか、利根川本川にそれぞれの川が流れ込んでいる、江戸川で流出していく、様々な、入って出るという関係の中で、水系全体で考えるということやってたんじゃないですか。ですから、これまでやってきたやり方というのは、道理に合ってたんです。しかし、明らかにご都合主義でハツ場とスーパー堤防のために、利根川と江戸川だけ決めてしまった。本川が決まったら、じゃあそこに流れ込む水の量というものは自ずと決定してしまうじゃないですか。それをお互いの関係性のなかで検討していくから、5つのブロックを一緒にやっていくということに意義がある、道理が、そういうことじゃないですか。したがって、そもそも、この計画そのものをやるということ自体が、わたくしはナンセンスだ、こういうふうに思います。しかし、ここでしゃべる以上、この水系の整備計画に

ついてわたしは申し上げたい。

まず、霞ヶ浦の関係に関して言えば、これまでやってきたことは、全て裏目に出た、こういう風に言わざるを得ない、例えば代表的なものは霞ヶ浦開発。つまり、この霞ヶ浦を水瓶化してしまったことによって起きている弊害が、今この流域にいる人たちの大きな問題ではないですか。つまり、常陸川水門を閉めて、これを水瓶化したことによって、一番ポイントになっている霞ヶ浦の汚染というのが始まっているんじゃないですか。よろしいですか、これを取り除けばこの汚染の問題というのは解決するんです。そして、この霞ヶ浦開発を行うべく常陸川水門を閉める、この時の人口の推計と、現在これから急激に減少していく社会、このことを考えて、今から50年後になれば、少なくとも50年前以前の人口になるんです。そうしたなかで、環境や水需要、そうしたものを、そういうサイズの中で考えて。しかし、50年たったらそこで止まるかということじゃなくて、100年、200年と人口が減っていく、つまり、来世紀になれば、22世紀になれば、この日本の人口は5000万人を割っていくという推計が出ているじゃないですか、そういうことを前提に考えたときに、今までやってしまった、人口が増えるということを経験して、やってしまったことについて全て見直す。これが河川整備計画の基本でなければならない、私はこう思いますよ。そして、この河川整備計画のなかでは、一部ではないです、一部でしたらありません、導水事業がメインになって、霞ヶ浦導水で、この霞ヶ浦の汚染がどうやって希釈されるんですか。つまり、現在CODで6から10という範囲の中で移動しているものが、導水事業によってどれだけ効果があるんだと、0.8じゃないですか。つまり誤差のうちにも入らない、そういうところに1900億円もかける、こういうようなことが折り込まれていること自体おかしい。そして、先程の霞ヶ浦開発で言えば、現実には、農業用水、工業用水、水道用水、これらの使用量というのは、開発水量の50%にも満たないじゃないですか、そして、利根川との連絡水路、これによって、東京と千葉に約45万トンぐらいの水がいくはずですが、しかし、利根川に国が霞ヶ浦の水を出した、その汚い水によって漁業被害が出て、あの利根川の水門が閉まったままじゃないですか。1995年の試験放水から、今日まで止まったままです。これから開けられる保証はない。そして、導水事業が行われても、同じ連絡路を使って利根川と霞ヶ浦と、そして那珂川を結ぶ、これはできっこない。できるのであればもうやっていなければだめ。

それから、水を受け取るはず、開発水量に対し負担金を出している、東京も千葉も何の問題も無く、本来なら大きな問題になっていることが、まったく起きないでいるということは、その水は必要じゃないということなんです。

水の問題で言えば、私がお手元にお配りした、これは茨城の水利用です、茨城はこれは私が県の水土地課によって、保有水源、全て県からの資料です。茨城では現在、水道用水で、湯西川ダムが完成したときで、市町村の保有水源を含めれば、約170万トン持っています。工業用水は約150万トン持っています、それで、それぞれ20

12年度でどれだけ使っているかといえば、最大取水量、1日最大取水量というのは年間で最も使ったピークの時点です、平均はもっと下がります、それが水道用水では98.9万トン、工業用水では約70万トン、そういう感じですよ、半分ずつしか使っていない、これだけ余っているという状況のなかで、導水事業は更に、45万トンの都市用水を開発しようとしている、すなわち、この水需要のうちの、水道用水、工業用水については、あるいは農業用水については、もう、まったく余っているんだということを前提で、この霞ヶ浦を眺めなければならない、このように思います。であるならば、今後の計画というものが、膨大な人口減少社会、そのことを前提に、そして、これは開発が引き起こした大きな負荷をどう取り除くかということが、テーマにならなければならないでしょう。

鬼怒川の水害に見られるように、大変、お気の毒な状態が起きました、しかし、これまでの河川整備、堤防によって河道に水をふさぎ込んでしまった。そのことによって、人々が、川岸までどんどん、どんどん開発されて、そこに住むようになってきた、しかし、水害というのは、人間の押さえようとした事に対して、それが破られたら水害であるけれども、本来は自然現象です。この自然現象に対して、災害になるという状態になるのは、人間が近づきすぎたから、そのように考えるべきです。

つまり、今から50年前、これから今後100年後、そういうときに起きる、人口と自然とのバランスを考えて、近づきすぎている現在の、つまり自然現象が災害になってしまうほど近づいてしまっているという、そういうことを根本から改めて、そのことが、本来、国がたてるこういう計画の、根本に据えていかなければならないのです。ですから、これ以上、まだ力業で、自然を押さえ込んで、そしてその中で人間が豊になるという幻想はもうやめましょう。つまり、私たちは自然と共存していける、そういう状況のなかで、自然と対応していく、それを霞ヶ浦から始めようではありませんか。

みなさんね、琵琶湖は関西圏の人達にとって、おおきな憩いの場所です、しかし、この霞ヶ浦はどうでしょうか。東京の人達に聞いて、わたくしも都民でありましたけれども、全く霞ヶ浦については認識の中にないです。これだけの巨大な水辺を持って、そして、かつては、あの帆引き船や様々な産物がここであった。そして美しい湿地帯が、それがこうして堤防で固められて、水瓶化されてしまった。そのことで、もはや霞ヶ浦は人間と自然が接する場所ではなくなってしまった。この環境科学センターを作っても、焼け石に水のような状態になっています。よろしいですか、高度成長時代には、工業力によって社会を発展させていこうということは、なかばそれを、(不明)ということの理由はうなづけます。しかし、今、この国の観光収入はどうなっていますか、当時とは比べものにならない、年々倍増していくような状況になって、であるならば、この霞ヶ浦は出来る限り自然で、しかし、人間の手があって優しく感じる自然が、全てがなんです、皆様の技術を持ってすれば。そして、古くからあるこの土地の人達が、そうした生業を復活させて、そこに、普通の人達、つまり、都会の人達、

あるいは、違う場所に住んでいる人達は魅力を感じるんです。そういう霞ヶ浦を復活させていくんだ、こういうことを前提にすべきです、ですから、この水瓶化を時代に合わせて、人口減少に合わせて、そして水瓶化をやめていく、つまり、霞ヶ浦の浄化というのは、常陸川水門を開けるのが一番いいんですよ。開けたらどうなるのか、開けて閉める事によって得られた利益と、開けることによる損失とどうバランスをとっていくのか、そういうことを人口が減少していく、様々な水需要が減っていく、そういうバランスのなかで考えていく、それが計画でしょう。そういうことを、この国がやらなければ、今、これまで掛けてしまった負荷は、1千兆円を超えるほどの負債を、私たちが子供や孫に、子々孫々に残して行きます。そして、環境の負荷は、この汚染状況は、それもまた負荷として子孫に残していく、ここで今、私達のやる責任は、どう自然を戻し、そして本来の人間らしい生き方を、どう共存していくか、そのことを計画として考えていくべきだと、私はこのように考えます。以上です。ありがとうございました。

以上